



から

ごのみ

宣秀觀道
沖國夫
用華地
激盛高
婉動名
必昭族
序

国宝 雪松図と中国の書画

Japan's Fascination with Chinese Painting and Calligraphy,
and the National Treasure *Pine Trees in the Snow*

2024. **11/23** 土祝 → 2025. **1/19** 日

PRESS RELEASE



三井記念美術館
Mitsui Memorial Museum

2024.9.13

から
唐ごのみ
—国宝 雪松図と中国の書画—

展覧会名 唐ごのみ —国宝 雪松図と中国の書画—
Japan's Fascination with Chinese Painting and Calligraphy,
and the National Treasure *Pine Trees in the Snow*

会期 2024年11月23日(土・祝)～2025年1月19日(日)
開館時間 10:00～17:00(入館は16:30まで)
休館日 月曜日(但し1月13日は開館)、年末年始12月27日(金)～1月3日(金)、1月14日(火)
主催 三井記念美術館
入館料 一般1,200(1,000)円/大学・高校生700(600)円/中学生以下無料
※70歳以上の方は1,000円(要証明)。
※20名様以上の団体の方は()内割引料金となります。
※リピーター割引:会期中一般券、学生券の半券のご提示で、2回目以降は()内割引料金となります。
※障害者手帳をご呈示いただいた方、およびその介護者1名は無料です(マイロIDも可)。

会場 三井記念美術館 / Mitsui Memorial Museum
[〒103-0022 東京都中央区日本橋室町2-1-1 三井本館7階]
東京メトロ銀座線「三越前」駅A7出口徒歩1分/東京メトロ半蔵門線「三越前」駅徒歩3分A7出口徒歩1分
/東京メトロ銀座線・東西線「日本橋」駅B9出口徒歩4分/
メトロリンク日本橋(無料巡回バス)乗降所「三井記念美術館」徒歩1分

読者からの
お問い合わせ先 050-5541-8600(ハローダイヤル)
ホームページ <https://www.mitsui-museum.jp>
その他 展覧会関連イベントについては、当館ホームページをご覧ください。

*開催内容を変更する場合がありますので、最新の情報は、当館ホームページまたはハローダイヤルにてご確認ください。また、展示室内の混雑を避けるため入場制限を行う場合があります。

| | |
|----------------------|--|
| 報道関係の方からの お問い合わせ先 | 三井記念美術館広報事務局 担当:富樫、大原、松井 TEL:03-6275-0243 / 080-5443-1112 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-41 神保町SF1ビル206 E-mail:mitsui@annex-inc.jp |
|----------------------|--|

《 展覧会の趣旨 》

江戸に店を構え、京を本拠地とした豪商の三井家は、自らがパトロンとして支援した^{まるやまおうきよ}円山応挙やその弟子の絵画を多く蔵していました。当館の絵画コレクションの筆頭である円山応挙筆「雪松図屏風」(国宝)は、京を代表する画家の名作として、幕末維新・震災・大戦の戦禍と幾多の困難を潜り抜けて、今日まで守り伝えられています。

そうした日本の絵画にくわえ、北三井家を筆頭とした各家においては、茶の湯の美意識に則った墨跡や、中国の宋～元代の画家の名を冠した絵画もまた、歴代にわたって珍重されました。また、近代の^{しんまち}新町三井家においては、9代^{たかかた}当主・高堅が中国の古拓本の名品を盛んに収集し、それらは現在、^{ていひょうかく}聴氷閣コレクションとして世界的に知られています。本展では、それらの北三井家・新町三井家旧蔵品を中心として、雪松図屏風と同様に、歴代にわたり珍重された中国の絵画や書および、それらに倣って日本で描かれた作品を紹介いたします。

くわえて、一部の作品については、江戸時代に記された鑑定書など、付属する資料と併せて展示いたします。作品の美しさと同時に、その作品がどのように受容されたかという「鑑賞の歴史」をも含めて、雪松図屏風とともに守り伝えられた数々の書画へ、思いを馳せていただければ幸いです。

なお、本展は東京国立博物館、台東区立書道博物館にて開催される展覧会「拓本のたのしみ」との連携展示となります。本展で展示されない当館蔵の古拓本の一部については、2025年1月4日～3月16日の日程で、台東区立書道博物館にて展示される予定です。

《 展示構成と主な出品作品 》

* : 広報用画像貸出作品

古拓本とその収集家

現在当館が所蔵する拓本はほぼ、^{たかかた}新町三井家9代・三井高堅(1867-1945)の旧蔵品からなります。高堅は三井銀行の取締役社長等、関連会社の重役を歴任する傍らで、古書画、とりわけ宋拓や唐拓といった古拓本の収集に力を注ぎました。それらは今日、高堅の号を冠して「^{ていひょうかくほん}聴氷閣本」と呼ばれ、世界屈指の拓本コレクションとして知られています。

これらの拓本の中には、旧蔵者を調べていくと中国の王室であったり、当代の一大収集家であったりと、高名なコレクターに行き着くものが散見されます。本章ではその中から、中国・明時代の^{あんこく}安国、^{こうげんべん}項元汴といった、斯界でよく知られた一大収集家の旧蔵品に焦点を当て、高堅が手にする以前の来歴に注目しつつ、名品を紹介いたします。



【図1】
李思訓碑 項墨林本(宋拓)
唐時代・開元28年(740)頃

唐の書家で行書に秀でた李邕の代表作として、古来喧伝される碑文。唐王朝の皇族で、著色山水画を大成した画家・李思訓を称える内容となっている。本帖は、明末の一大書画コレクターである項元汴の旧蔵にかかり、帖中にも彼の鑑蔵印が捺される。



【図2】*
石鼓文 中權本(宋拓) 戦国時代・前5～前4世紀

石鼓文は、太鼓型の石の側面に刻まれた銘文で、篆書の一書体「大篆」を学ぶうえでの基本とされる。かつて本帖を手に入れた安国は明代を代表する書画コレクターで、とりわけ「石鼓文」の収集に執心した人物。十種の石鼓文を20年近くにわたって収集したことになみ、書齋を「十鼓齋」と名付けるほどであった。中でも最多字本である本帖は、安国のお気に入りの逸品。子孫へ宛てた跋文には、本帖を末永く守り伝えるよう記している。また、元末の四大家の一人として知られる画家・倪瓚が、鑑賞した旨を自ら記す。

*：広報用画像貸出作品

北三井家旧蔵の書画

円山応挙筆「雪松図屏風」は、応挙の作品で唯一の国宝であり、当館の絵画コレクションを代表する作品です。十一家ある三井家のうち、応挙と特に深く交わった惣領家・北三井家の注文品とされ、同家において守り継がれてきました。江戸時代の北三井家の記録からは、同家が応挙に限らず、古今の日本・中国絵画を所蔵していたことが知られますが、茶の湯に親しんだ影響からか、宋～元時代の中国絵画が多くみられます。その中には現在の館藏品と思しき作品も複数見出すことができ、江戸時代の京の町人の美意識を垣間見ることができる点で、貴重と言えるでしょう。

本章では雪松図屏風を中心に据え、同作と共に北三井家へ伝わった中国絵画・書を紹介します。



[図3]*

国宝 雪松図屏風 円山応挙筆
江戸時代・18世紀

雪の部分塗り残すことで、紙の白と水墨の黒のみで雪を被った松を描く。円山応挙の代表作として知られるが、本作が描かれた経緯は未だ明らかとなっていない。しかしながら、本作に用いられた継ぎ目のない大判の紙は当時、非常に貴重であり、それがこうした美しい状態で現在まで伝えられているという事実は、雪松図が三井家にとって特別な作品であったことを想像させる。



[図4]*
海鶴蟠桃図 伝呂紀筆 明時代・16～17世紀

表具を含めると縦2メートル以上にも及ぶ大幅。長寿を象徴する鶴や桃といったモチーフを中心に構成され、吉祥性への意識が垣間見える。

[図5]*
藤花独猫図 沈南蘋筆
清時代・18世紀

フジ、ジャクヤクとみられる花の下、ふち猫が他方を見つめている。足元には数輪のタンポポも見え、5月頃の花模様を思わせる。沈南蘋(沈銓)は清時代の画家で、迫真性の高い画風を日本へ伝えた。本幅は19世紀初めまでに、北三井家へ11幅対として伝わったことが資料より知られる。



* : 広報用画像貸出作品



〔図6〕
牧牛山水図 伝張芳汝筆
室町時代・15～16世紀

牛を連れて放浪する高士を二幅に描く。おそらく中国絵画を模して日本で描かれたとみられるが、相阿弥筆と伝わる外題（現代における作品ラベル兼、鑑定書に相当）が付属するほか、狩野探幽ら、江戸時代の画家の鑑定を経たことが資料から分かるなど、近世には「中国絵画の名品」として珍重されていた。北三井家6代・高祐の日記には、文化3年（1806）に「芸州様」、すなわち広島藩主の浅野氏に見せた旨が記され、三井家にとっても重要な作品であったことが窺える。



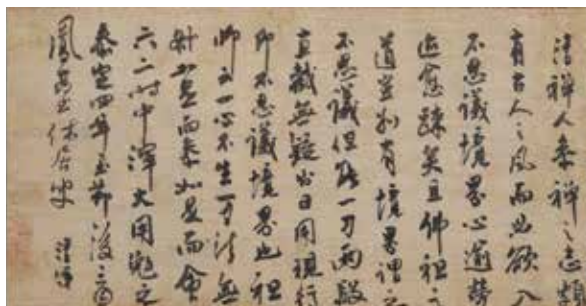
〔図7〕*
竹虎図 伝顔輝筆 16世紀

ぬるりとした毛皮の描写が特徴的な虎図で、水墨で描かれた竹からは、強風が吹きすさぶ様子が見てとれる。元時代の画家・顔輝の作と伝わるが、画絹や作風の特徴から朝鮮絵画の可能性も考えられ、近代以前の日本における、舶来の絵画受容のあり方を考える上で興味深い。

書と墨跡

鎌倉時代の禅僧・栄西が中国へ渡り、禅宗とともに喫茶の習慣を日本に持ち帰ったことから、茶の湯の世界においては「墨跡」、すなわち禅僧による書が珍重されてきました。茶会における墨跡の使用については、侘茶の精神と禅宗の精神とに共通性が見出されたことを一因とするとの指摘もあり、単に見て楽しむだけでなく、高僧の遺物として時に尊崇の対象となったことも特徴です。そうした書画が高名な茶人や大名に愛玩されることで、歴代の所蔵者にまつわる逸話が付随し、時にそれは誇張されることすらありました。

本章では禅僧の墨跡や、中世の禅僧が愛好した中国宋～元時代の書家の作と伝わる書を中心に、伝来にまつわるエピソードを交えつつ紹介いたします。



〔図8〕*
重要文化財 古林清茂墨跡(与無夢一清語)
元時代・泰定4年(1327)

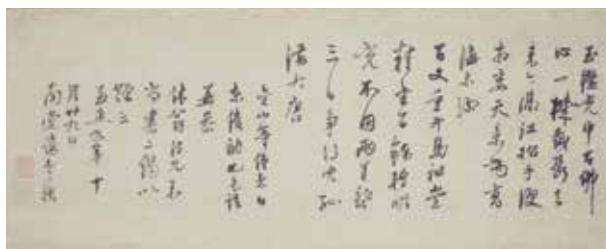
古林清茂は元時代を代表する臨済宗の禅僧。本幅はその最晩年に、日本からの留学僧であった無夢一清へ与えた書であり、熱心な参禅を賞し、一層の勉学を説示している。

* : 広報用画像貸出作品

[図9]

了庵清欲墨跡 偈頌

元時代・至正9年(1349)



「南堂」の号でも知られる元時代の禅僧・了庵清欲が、日本からの留学僧へ与えた書。了庵の書は利休が好んだことで知られ、本幅もかつて茶人で豪商の佐野（灰屋）紹益が所持した。のち新町三井家が入手したが、幕末に小浜藩酒井家へ売却。さらに近代になって、北三井家が酒井家から買い戻したという数奇な伝来をもつ。この時、北三井家は北野肩衝茶入や二徳三島茶碗（いずれも現・当館蔵）といった茶道具の名品も同時に買い戻しており、こだわりの一幅といえる。

[図10]

陳大觀園中竹一首 伝蘇軾・黄庭堅筆

16～17世紀



蘇軾と黄庭堅は北宋時代の文人で、日本でも中世以来、禅僧を中心に高い人気を誇った。箱書によれば、本幅は加藤清正が朝鮮出兵時、現地で得て豊臣秀吉に献上したもので、秀吉はこれを連歌師の里村紹巴に与え、以降同家に伝わったという。伝来の真偽はともあれ、表具の天地は秀吉が馬印にも用いた瓢箪の文様で仕立てられている。秀吉ゆかりの品という伝説とともに、茶席で愛でられたのであろうか。

名物絵画の世界

古代から中世において、天皇家や将軍家で所有された器物のうち、特に優れたものは「名物」として他の器物と区別されていました。この「名物」という言葉は、時代が下ると、それに匹敵する鑑賞性・市場価値を備えた茶道具や刀剣にも用いられ始め、「千家名物」など所有者の名を冠して呼ばれるようになります。

当館の所蔵品には、出雲国松江藩10代藩主であり大名茶人の松平不昧（治郷、1751-1818）の旧蔵品、通称「雲州名物」の絵画が複数含まれており、それらはいずれも新町三井家によって、昭和の初め頃に収集されたものです。これらの作品を納める箱には、取引時の領収書、古美術商からの手紙といった文書が多く付属しており、コレクションの歴史をひもとく上で重要な資料となっています。

本章では館蔵品の中から、この「雲州名物」と、徳川幕府の旧蔵品である「柳営御物」に焦点を当て、付属資料とともに展示します。この他にも、伝来にまつわる興味深い情報を含む作品を併せて展示し、鑑賞・愛玩した人々の歴史に注目します。

[図11]*

六祖破経図 梁楷筆 南宋時代・13世紀

南宋の水墨画家・梁楷の作とされ、禅宗第六祖の慧能が描かれる。悟りへの道は言葉で表せない、という禅の立場を、經典を破る姿で描いたもの。足利義満の鑑蔵印「道有」が右下に捺され、のち足利義政、豊臣秀吉、東本願寺と伝わり、江戸後期には出雲国松江藩の10代藩主で、大名茶人として知られる松平不昧が所蔵している。当初は「六祖截竹図」（重要文化財、東京国立博物館蔵）と対幅をなし、梁楷の水墨画の優品として共に尊ばれてきた。



* : 広報用画像貸出作品



〔図12〕
白梅図 伝銭選筆 室町～桃山時代・15～16世紀

南宋の画家で、字の「舜琴」でも知られる銭選の作として伝わった作品。宝永6年(1709)、京の薬種商・播磨屋長右衛門の記した書状が添い、それによれば「松屋会記」で知られる奈良の塗師・松屋から入手したという。宋元画を手本に日本で描かれた作品とみられるが、茶の湯の世界においては「中国絵画」として、江戸時代を通じて大切にされていた。

本作も松平不昧旧蔵で、昭和初期、松平家が所蔵の茶道具を売却していた頃に、新町三井家が入手している。



〔図13〕
川苳図 伝牧谿筆 14～16世紀

徳川幕府の旧蔵品である「柳宮御物」の一つ。小松菜のような葉野菜が葉を下にして束ねられ、ラッキョウのような植物が間に刺されている。

元々は江戸前期を代表する画家・狩野探幽(1602-74)の所蔵品で、幕府に献上されたのち、土浦藩土屋家へ下賜された。探幽以前の所蔵者については不明瞭だが、かつて茶の湯の名物を多く蔵した東大寺四聖坊にあった可能性も高く、早くから牧谿の作品として珍重されていたとみられる。



〔図14〕
薑図 伝趙昌筆 明時代

薑とはショウガの異称。画面の傷みが惜しまれるが、茎の根元や根の先端がほんのり赤く、新ショウガの特徴をよく捉えている。筆者と伝わる趙昌は北宋の花鳥画家である。

仙台藩伊達家旧蔵で、伊達綱村(1659-1719)の代には茶会の掛物として愛用されていた。綱村が本幅を掛けた茶会には、画家・狩野常信を招いており、常信による鑑定書も付属している。



〔図15〕*
牡丹図 伝黄筌筆 明時代

大輪の牡丹がボリューム豊かに描かれる。伝称筆者の黄筌は、五代十国時代の画家だが、本幅を入手した三井高堅は宋時代の絵と捉えていたようで、箱書には「宋人」とある。東山御物のような名物絵画をイメージして、牡丹文づくしの豪華な表具で仕立てている。

唐ごのみ
—国宝 雪松図と中国の書画—

展覧会広報用画像について

展覧会の広報用貸出画像データ／読者プレゼント招待券をご希望される方は、下記ご確認の上お申し込みください。

- * 画像は展覧会の広報用としての使用に限らせていただきます。展覧会終了後の利用、また二次利用はお断りしております。
- * 画像掲載にあたっては、【記載クレジット】を必ずご記載ください。
- * Webサイトで掲載の場合は、必ず画像にコピーガードをかけてください。
- * 読者プレゼントの際には作品画像を掲載し、展覧会会期中にご紹介ください。またお手数ですが、招待券プレゼントの受付・発送などは貴社、貴編集部にてお願いいたします。
- * ご掲載紙・誌等は広報事務局までご送付ください。

[貸出画像リスト] 作品掲載にあたっては下記の情報をご明記ください

| | | | |
|-------|----------------------|------------------------|----------|
| 図2 | 石鼓文 中権本(宋拓) | 戦国時代・前5～前4世紀 | 三井記念美術館蔵 |
| 図3 | 国宝 雪松図屏風 円山応挙筆 | 江戸時代・18世紀 | 三井記念美術館蔵 |
| 図4 | 海鶴蟠桃図 伝呂紀筆 | 明時代・16～17世紀 | 三井記念美術館蔵 |
| 図5 | 藤花独猫図 沈南蘋筆 | 清時代・18世紀 | 三井記念美術館蔵 |
| 図7 | 竹虎図 伝顔輝筆 | 16世紀 | 三井記念美術館蔵 |
| 図8 | 重要文化財 古林清茂墨跡(与無夢一清語) | 元時代・泰定4年(1327) | 三井記念美術館蔵 |
| 図11 | 六祖破経図 梁楷筆 | 南宋時代・13世紀 | 三井記念美術館蔵 |
| 図15 | 牡丹図 伝黄筌筆 | 明時代 | 三井記念美術館蔵 |
| 読者招待券 | 5組10枚まで受付 | ※申し込み受付は 2024年11月22日まで | |

お申し込み方法

当館ホームページ「プレスの方へ」ページの申込フォームに必要事項を入力し、お申し込みください。

入力いただいたアドレスに広報事務局よりメールをお送りします。



三井記念美術館ホームページ「プレスの方へ」ページ
<https://www.mitsui-museum.jp/press/press.html>

プレス関係の方からの
お問い合わせ先

三井記念美術館広報事務局 担当:富樫、大原、松井 TEL:03-6275-0243 / 080-5443-1112
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-41 神保町SF1ビル206 E-mail:mitsui@annex-inc.jp